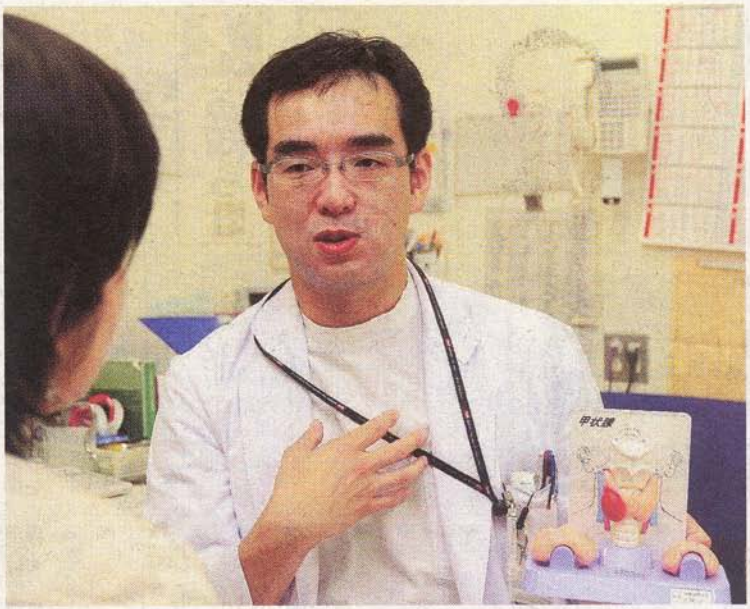
北海道新聞　2009年（平成21年）9月30日（水曜日）

旭医大・片山医師

原発事故後、甲状腺がん増加

ベラルーシで医療支援



内視鏡手術を広めるためベラルーシに出発する片山さん

チェルノブイリ原発事故が起きたウクライナ（旧ソ連）の隣国ベラルーシでの甲状腺がん治療のため、医療支援チームの一員として旭川市在住の男性医師が10月上旬から、同国で内視鏡手術に当たる。「傷跡が小さくてすむ内視鏡手術で患者を救い、この手術方法をベラルーシに根づかせたい」と話している。（田口谷優子）

旭川医大耳鼻咽喉科の医師片山昭公さん(41)。ベラルーシの現地医師への指導などを実施しているNPO法人「チェルノブイリ医療支援ネットワーク」（福岡）の派遣チームの1人として医療支援に参加する。

片山さんは、日本で内視鏡による甲状腺がん手術を受けたベラルーシの女性患者が「小さな傷跡ですんで幸せ」と喜んだ話を聞き、「そうした人が一人でも増えてほしい」と参加を決めた。海外での医療ボランティアは初めてという。

今回の派遣チームの執刀医は、甲状腺の内視鏡手術の第一人者で長年ベラルーシの医療支援ボランティアに取り組む清水一雄・日本医科大教授。片山さんは現地では清水教授の助手を務める。

4日から13日までの日程で患者2人の手術を予定。ベラルーシで日本人医師が内視鏡による甲状腺がんの手術を行うのは初めてという。

甲状腺がんの手術は、ベラルーシでは首の下に目立つ傷跡が残ることが多いが、内視鏡手術は入院期間が短く傷跡も小さいことから、同法人は「日本の医療技術を現地の医師らに紹介したい」としている。

1986年のチェルノブイリ原発事故後、周辺地域では甲状腺がんが増え、事故との因果関係が指摘されている。片山さんは「チームの活動が現地で病に苦しむ人たちの一助になれば」と話している。

4日に現地へ「日本の手術法広めたい」